

都市の緑
3 表彰

緑 が つ な ぐ

町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文: 斎藤夕子 photo: 坂本政十 賜

[第43回]

緑の都市賞

国土交通大臣賞: 緑の事業活動部門



大日本印刷株式会社 市谷の杜

都市における新しい森

「ホトトギスの花が咲き始めました。今年は暑いので少し遅めですね」。真夏日を記録した10月初旬、新宿

区市谷加賀町にある大日本印刷株式会社 (DNP)、社屋のエントランスを構成する緑地に咲く紫色の花を指してそう教えてくれるのは、同社ファシリティマネジメント推進部の上條芳樹さんだ。見渡せば周囲には豊か



ガラスファサード越しに豊かな緑を望む1階ロビー



都心とは思えないほどに深みを感じさせる雑木林

な雑木林がガラスのファサードをもつ近代的な社屋を囲むように広がっている。民間企業の敷地内でありながら、木立の中には、ベビーカーを押して散歩する若いお母さんの姿や、おしゃべりしながら歩くお年寄りご夫婦の姿もある。「朝夕は犬の散歩をしている人もよく見かけます」とはサステナビリティ推進委員会事務局の鈴木由香さん。近隣保育園のお散歩コースにもなっているという。

1876年に銀座で創業した大日本印刷株式会社は、1886年に市谷加賀町に工場を開設(後に本社も移転)して以降、当地に根ざした企業として発展してきた。1990年代に検討を始めた、総敷地面積約5万4000m²の再開発は、東京都及び新宿区との都市計画決定を受け2009年に着工。社屋の高層化、工場などの生産機能の地下化を図り、企業としての生産性や業務効率を高めることが主目的であったが、これに伴い誕生した人工地盤上の有効空地のうち約2万m²を、地域に開かれた緑地「市谷の杜」とすることを計画。2015年の本社ビル竣工に合わせて約6000m²の緑地を造成して以降、順次整備が進められ、2024年現在までに約1万5000m²でこれを実現している。

同社では再開発にあたり、市谷の杜については社内「建築チーム」「環境チーム」「ファシリティチーム」を構成、3チームが連携しながらプロジェクトを進めてきた。先の鈴木さんは環境チームとして全体的な環境

マネジメントを担い、ファシリティチームは上條さんをリーダーに、六本木聡さん、金子仁さんの3名で、日常的な市谷の杜の維持管理を担っている。

市谷本来の風景を目指した
「武蔵野の雑木林」

緑地のコンセプトは「武蔵野の雑木林」。計画段階から度々開催されてきた地域住民らとのセミナーやワークショップにより、もともと起伏のある市谷の土地にあったかつての風景を探り、気候風土に適した関東近郊の地域性在来種により構成される「自然らしい森」づくりを目指した。緑化エリアを6区画にゾーニングし、エントランス付近にはコナラを中心とした明るい森を、東側の傾斜地には谷地をイメージした常緑樹や紅葉を楽しめるイロハモミジを、というように、地形や環境に合わせた植栽を行っている。

人工地盤上の森であるだけに、盛り土と排水への工夫は欠かせない。盛り土に関しては、樹木の育成を第一に考え、人工軽量土ではなく関東ローム層の赤土を採用し、約1.5mの被り厚を確保した。躯体と盛り土の間には排水溝付き軽量かさ上げ材を配し、速やかな排水を促すと同時に、植物にとって十分な保水が得られるよう、表層に落ち葉層を設けるといった対応も行った。さらに建物からの排水を活用した灌漑装置として



2015年に竣工した大日本印刷株式会社社屋を囲む「市谷の杜」



左●東側の森へつながる歩道橋沿
上●東側の斜面地を構成するイロハモミジ
右●東側の森の中に自生するクサギ



左●森の中を飛び交うアオスジアゲハ
上●再開発に合わせ、敷地周辺の歩道も拡幅した
右●2020年に竣工した文化施設「市谷の杜 本と活字館」。市谷工場のシンボルだった時計台を復元



自動制御のスプリンクラーも設置されている。

「〈自然らしい森〉であることが最大のコンセプトなので、過度な除草や剪定は行わず、基本的には植生の変遷も自然状態に任せることにしています。ただ、地域の方々にも安全に、安心して訪れていただけるよう、たとえば、道路沿いでは歩行者の見通しを遮る〈葉張り〉がないよう剪定したり、散策路沿いの、人目につく樹木に害虫が発生した場合には、スポット的に駆除したりしています」と上條さん。この他、敷地内には防犯カメラを搭載した防犯灯を設置しているが、森の状態を知るには目視が大切で、メンバーが週に2、3回はエリア内を巡回し、落枝や立ち枯れなどが起きていないか確認しているという。

ただ、メンバー全員、もともと植物に詳しくなかったわけではない。上條さんは「私は8年ほど前にチームに加わりましたが、虫が苦手なので、最初は本当に困りました。木の種類もまったくわかりませんし、森で何か起きていても、それが生態系として正常なのか異常なのか、

さっぱりわかりませんでした」と言う。そこで彼らが始めたのが「気づき記録」と称する観察記録の作成だった。とにかく森の中を歩き、観察し「白い花が咲いた」「毛虫が発生した」など、ほんの些細なことでも、気づいたことはすべて記録。それが何月何日で、何の木の花で、何の木の葉にどんな虫がついていたのかといったことを後から調べ、花の名、木の名、虫の種類を一つひとつ覚え、季節や気温に応じた森の変化を把握していった。そうして5年ほど前からは、除草対象の外来種、雑草に見えても残す必要のある在来種などに関する写真付きのリストを作成し、森の手入れを行う事業者への指示を出せるまでになったそうだ。

写真付きリストは常にブラッシュアップされており、ようやく内容が充実し、専門の事業者ではなくても、リストを参考に草木を見分けられるようになったことから、2024年4月からはエリアの1/3程度の範囲を、特例子会社の社員数名で除草作業を行い始めたという。「森の手入れを内製化し、社員自ら森の管理を行うことは

当初からの目標。社員の教育も含め計画的に行っており、それが順調に実施され始めたところです」と上條さんは言う。

地域の自然資源として

メンバーの皆さんに案内を受けながら、緑地内を見て回る。東側の常緑樹の森の中に、ピンク色の花が見えた。いつしか自生していたというクサギの花だ。この他にも、タラノキやフキ、ウツギなどの自生も確認されており、人工的につくられた森が、自然に更新している様子が見えてくる。一般には雑草として除草されるドクダミも、ここでは残すべき在来種。強い悪臭を放つツル性植物のウマノスズクサも、ジャコウアゲハの食草として大切に残されている。日差しは夏のように強くても、木陰に入るとひんやり涼しい。森の中ではコオロギの声が至るところに響き、秋の訪れを感じる。目の前をヒラヒラと横切るのは、雑木林に植樹されてい

るタブなどを食草とするアオスジアゲハだ。鳥の訪れも多く、ヒヨドリやキジバト、ドバトの営巣も確認しているそうだ。

「9月半ばくらいまでは毛虫が多くて大変でしたが、散策路を歩く人に影響がないようであれば、基本的には、自然減に任せているんです」と教えてくれるのは六本木さんだ。そう言う端から金子さんが、まだ葉についていた毛虫を指し「こんな感じです」と見せてくれるのには悲鳴を飲み込んだが、きれいだけではない、自然のありのままの森の姿を再現し、育んでいこうとするファシリティチームの心意気を感じられた。

「庭園のような華やかさはありませんし、雑草が生えたままで整備されていないと感じられることもあるかもしれませんが、最初の区画が整備されてから約10年が経ち、社員はもちろん、地域の方々にも、季節の花や虫の声に季節の移ろいを感じているといった声をいただくようになりました。森にとってはまだ10年、これからも成長し、充実していくなかで、地域の資源、資産となっていくよう、しっかり社員がかかわりながら、維持管理を行っていきたいと思っています」と鈴木さんは言う。

民間企業の再開発で造成された森には、業務における社員の創造性、生産性の向上につなげるという目的もある。ただそのことを定量的に証明することは難しい。しかし、都市の中の緑地の存在に価値を認め、これほど本格的な森を、本気で創出した企業であることを社員が誇りに思わないはずがない。また開かれた森として、地域の人々も訪れ、親しんでもらうことで、企業と地域の良好な関係が築かれている。そしてこのことが、市谷エリア全体のシビックプライドを高めていることは間違いない。



2023年に整備されたばかりの北側の森



緑地内の植物リサイクルを目指し、北側の森の一角にはコンポスト3基を設置



「市谷の杜」を守り、育むプロジェクトメンバー。
左から、上條さん、鈴木さん、六本木さん、金子さん